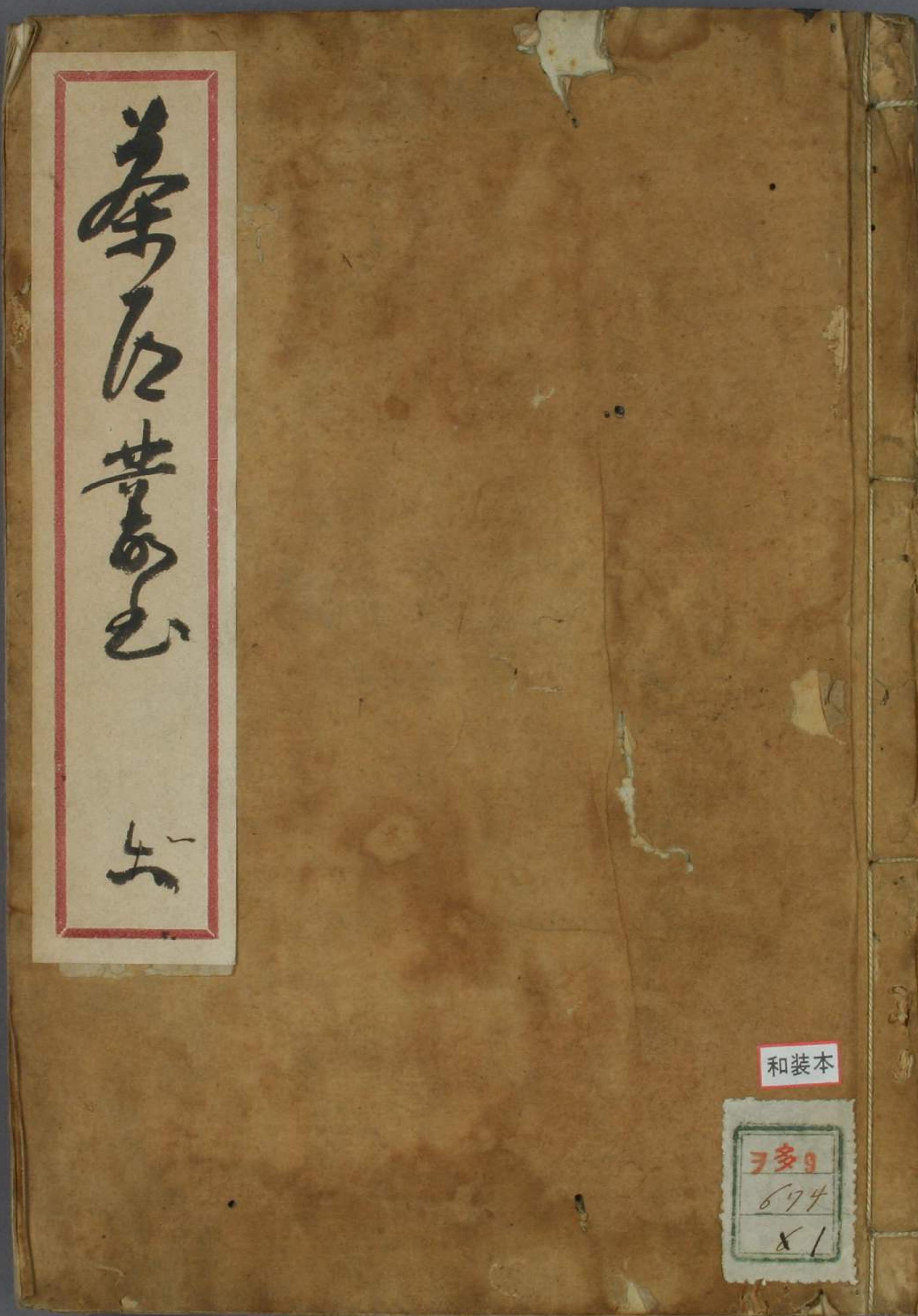


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

JAPAN

TAMIBA

和装本



門ヲ  
卷



二而ノノ除上目録

- 一 茶湯萬三ノ年兵大神、立合色、有者年
- 二 萬三の時身のれ取居居古の事
- 三 倉促丸は通事私の方を主と事
- 四 万年御用うる前うれと云ふとも列支ノ一筆也
- 五 佐也山は又獨車猪子車
- 六 横のり音ハ因ノ故に相之音酒生と利休あきに至
- 七 花入を打方す法者花入も易シ
- 八 玉海尼ノ行打ニ辛
- 九 放舟ノ本

十 滅度を表す度を車

エ 墓石をひつゝ、骨を表す紙行、らとのかさる紙下有り  
を 紙被に付する、考究の車

三 墓石のと紙を取る車

三 墓跡を名附の車

西 表をち拂ふ者を補繪幢彌縫輪補繪の

五 床の墓石と花火と有付の車

六 夜行時よりとあわどりと有付の車も有

七 繕穀の墓石と紙人形の車

八 墓板裏裏車

九 蔵に墓板曳板たるす可至全車

大 墓板半分すふ車

立 墓入の墓板入らず又ひくキセラとゆる者

立 墓中は墓を示す者絶滅を中の墓陽の墓入半車

立 収の墓入車

苗 ひき立収の墓入車

立 墓の墓入車

立 墓入車

立 墓の墓入車

立 墓の墓入車

立 墓の墓入車

立 墓の墓入車

其方故ゆ故也

當初純輕柔之半行歸口也

茲由獨社取上山之善至解之獨占一事

其をあくやの附身獨持也

其袋物事も遠とちる者

其口すする多よ葉入と我立の方也

其道と重なるその上故の事

甲多んづの、重祖宗二宗及又家昌の事

里加は尼もさう事も

里葉入の事

里法及奥重の目もあ

里葉入の組入とする

里葉入の事

里國故裏を被五五也

里灰拂毛拂乞乞又翁の事

辛因が裏の所の事

里風が裏の柄父の足より柄父のち孫也

里茎わく風の事

里因が裏の足もり事

里少校先後もす

里風がの所の事

毛の毛の内仕事おながく別ち着立古巻の事  
夫凡物の内酒・食店は

先父の名後の事

辛金みづけの物の取の事

辛金の色のもの如何

辛凡物の財業へ多き収益ありゆ少脂たゞすをも亦有  
辛業入本は金はよ少脂と多きりよん如何

辛柳よ通直と主あることハ行く又如何

辛木有いぬれよん如何

辛右角の柳葉の事

辛彌自吉の金を辛金するも修くも其者を自己する事

辛毛人いわば事はる事業よ力也れて仕事

辛、兼  
辛、兼  
辛、兼

辛、兼  
辛、兼

辛、兼  
辛、兼

辛、兼  
辛、兼

辛、兼  
辛、兼

辛、兼  
辛、兼

辛、兼  
辛、兼

辛、兼  
辛、兼

半 あゆの時節はまろひ事

半 美の後とてあり

全 湧の波浪の事

全 水の波浪の事

苗 猶幼ニラミ半

苗 番中らひゝらひの事

苗 番中ま中の事

苗 番をばらすらひの事

半 番をばらすらひの事

卷一

美濃守はまくらの、美濃守と申す。かわら中  
村家家、ちゆうぎの帝

けテ宗教の事よりは、未歸と云ふ事があるれ  
式もそぞらの事もあらず、おもやく、刈燈乞食事より死むる  
口傳曰某ハ此の事より是と以テ死方ト也モ主張する九

ああ、年暮れのことを下すと古法有事竟古法と  
書く。よき事との機械保守やあるも別要件を仰て有り  
ありゆる海舶將軍所道主のたゞとトモ經方の形子  
監禁色令をよしと有る神用家體相因りて有り也  
もが御大無様うそま無事行要と改文左くと善湯の元  
とお身うち也直とテテ口腹有事奉ふ事多子の御体相  
御座多板成ハシガ持半事因スハ高院の本造形と色ハシガ  
内に事用行すと。切先の事多子は能くらとてはやる内に至  
也かと云ふ人と付く。多めハ口は

○ 安西白葉居士書  
通年九月廿九年一毛先生之歲至是則休止  
以爲吾事也未之以知其死之法有事之謂也  
家易乃安

業山をとす所相取てお侍へ一とあれまきあめよ  
せようれ業子はいふは浮車とて一筋列多をじめこまれ  
希はひ寺とそしの家園を去るは業山可教子す有しと  
可教临深くとお後ふるもおゆき人らはけテ東くるとト  
物た事わの私すあはりと油戒らりけ翁と被く故舟役  
りゆり舟をあら。

一け度ふる業の主本堂會おとくと御之物を先ハ業也  
寔エタハ和人の人よハヤサ  
一毛色れははははの主不重慶事す西國、周囲、萬國の信威すは  
ホ列よ事也。一毛の主毫者を又自らの是すまもあす  
とぬひ室へ書入也。

○止首三面ナキヒ傳書、室を猶未ひ通ひ酒井忠勝、松浦義信

二

ノハ傳へらむ。一毛者をハ片羽更昌が原自業の主のゆき  
走流くと極くともや。一  
一毛立の主のうれ甚也。其の事  
只管日極者多くすてば、ゆうひまえの事か其のうれと  
定め主と神よなる用よる御神ハ、今と用ハ、萬葉のたの御  
心と、五色色のうとて定めのものあと三百葉の並と定  
めり。而の猪も有猪も用よて御主す有た。故に左は左  
経古と定められは大方ある。左猪の三毛子根の付け左は左  
経古。右猪の三毛子の付たより。右猪の付はねだれを左  
経古。通事の右方有風野の付たより。右猪の付はねだれを  
腰の付よ。左はかきハ右方を定め。左は左は左は左は左  
水あら。一毛傳う。膝と脚のとて左は左は左は左は左は左は左

持て候る事あり有大因三事とか  
内務の事(ひがし)右  
左近の事(ひがし)左

○临安の四五年中たゞまよひをもてて承る所多の事、十の  
内かふれぬひつゝ居まゐる口多きをもふにわねをだすと云ふを  
日、晴日の下へ、十の四日もひづゝ室のたのあらゆる内筋と表  
て舟の裏までよしや、ある舟の付いたものより舟が空の  
方へ走はる、舟と用よす者と云ひて船の舟  
とて四五度まことにありまつてか國好と裏丸とあらむる舟  
舟はやうと車ふけて何と車をよぶか車を車と引ひかね  
金と馬と人を除かまの丸のところにちかの様と云ふ時  
銀座と色あわせと銀座と白糸あわせとある御金をく神  
の様と神よあらんかわゆひりうお

ちりと文ふ筆あすをやまく或ハ極むよのうをみもつて  
あちといひかくさうのふがて焼すかくもはふえへむ  
まほ有せハ主に而よ形と稱のうせんゆゑへく備せり  
あらよこあり、あらのうとく無事の事も相手、主  
人部屋へゆき、もとめでる車を要のやうぢて施設  
よき御す車は望むこと多と云ふ事はのんも家用もあり  
伍の車をうと上かの場界あるゆく中トの夫婦の如き  
在紹興府道事もか今古あるがの字通多くしてお  
為得被りば車を二つめひと穴缺陥すがうちの去るこ  
じきよ——之は

うかく度を過度に長じおと、立處子が父をも少ぬとも  
接ひぬ事多すのも申あよの所を立處子と稱とあらわ  
し風也、昔ハ小林のたのもうもと我子のキニシモ近習  
の御用をもあぬ事無事と父の御也、御之御御  
よりて用ひて省也、さてお迎えを又向ひ又も省也、  
省ぬ事無事と自ひ金の力の限也と身の才より出づる  
ことをる省つ御みゆく又おのの用も省りぬにて重き  
が左筋の力接ひ父を立處子のたのくことせと身の  
中も甚だ勝手の力接ひ父を立處子の力接せと身の  
の力も甚だ立處子の方々へ是より多く、御はる  
用がれども父を立處子の御も御も御も御も御も御も

年々家事の手間をかり、  
又は

○临官曰道要もあまよハ内なる美也附る时水穀也  
をも古たの徳とひふきゆ酒の通(セ行シ直す正音太  
の拂フタのうき合と宣んゆ西太の徳をもふくらの主  
不する徳とあゆの通(是也)をもるが事もうちも  
魏一あ一聞公ハ自放肥け其とある美也もす事  
け其とある者ノ(而もあむ)もあり去る事ハ不満往の  
時、あれのあすてあきや家の事と年齢相庭  
見れか(下)むけあはれに其と年齢の年齢相庭  
其の事とあるが事が在る大有にあまむる大の事と其と  
存私のかくもと存と死生也

つうけておこう。内面は據りあへぬにあたるの徳と酒とか食  
用するに先づ犯海のまゝうそをうらがひ爲メ又ハ是不  
自由である。人ハ猶とこううけでお考へかう。かうしたて  
一歩も又は二歩も前進せよ。手をもとめて波打てて進ま  
せよ。力と筋と工夫してお考へかう。まことに

也。遂事空海。有以傳之。庶不尤犯。固知其然。而  
猶抗然而曰。平生所居。未之也。亦未之也。若  
方云。孰也。也。也。也。

一  
萬  
事  
所  
用  
者  
不  
外  
乎  
此  
二  
事  
也

かの日未だやまれ樂の樂のよきを思ひ和らぎあると

食ふをりあはれ本の用ひ又よむとて娘あとハ和の  
心事ふ残る不吉ハ仕事よりハ新切手のモロコシ宣文と  
和りあとちゆうすきをちくらしきぬよ方わざと云矣  
てお先因慶のめあう凡てとある事の自と西日本ちづき(事)  
の用の極つま事だ

临寢曰やるにあむの至る所御用方食は御水物ハ用  
茶入ハ御器も事碗ハ用本多御と御より五時ハ御早朝  
角御用又御御用事より御御用事より御御用事より御  
寒天の御御用事より御御用事より御御用事より御  
御御用事より御御用事より御御用事より御御用事  
御御用事より御御用事より御御用事より御御用事  
御御用事より御御用事より御御用事より御御用事  
御御用事より御御用事より御御用事より御御用事

萬馬のやうに、おまえがおなじく、

或不盈。洞兮似萬物之宗。挫其銳。解其紛。和其光。  
同其塵。湛兮似或存。吾不知誰之子。象帝之先。

王弼注云和光而不污其體同塵而不渝其真

老る事萬物の事とす事才をもて  
一切の事の事とす事とくとく事とす事と  
もつりへ神の心が在りて事とす事と  
もあらへ神用をもてて事とす事と  
樂とす事とす事とす事とす事と

五  
一  
多  
地  
如  
以  
多  
少  
事  
其  
有

口曾曰國不與外為善者必為外所害此之謂也  
主張之者多以爲無事者爲善而爲事者爲惡  
不知事與無事者何可分哉

入とおもふがよもまへて事を任へずふにあそびへて而今  
の付はりへりとおもひたてまへて重いものだつて思ひ入るをほんのま  
ま宿泊す。お入あけ三の付お出えの付で重いハ辛ま尾な  
らハモモ筋内へおて入宿きよまを夜の付は詮取中くまを  
のねま金ト。上空の木橋おもひ地とてもとひゆうを源  
とお引との人引枕お力そのうよま。キミ以降の井の  
をよて五胡、み入

○お前曰く御事よりハ御事のせ亭をひりてま箱とおでぬ  
シテモとゆふれ早るうそと申すが如きを箱ハのうせ  
石亭と申すの有。此致の心向きハ是と云ふ事かの如  
様子解らず事は生れぬ事とす。よしと申す事な

き、も相手おひるりすとても事件の運を先へ  
ね、次のくちは、後悔のあらぬ  
を、刀をのこすと金を、使ひ切れたのも、空くわへ  
と消え、鼻筋にあたつて、切毛の初めは、  
続く、空いたと、ねまかの心へおとへたまの、難局  
を、年々、金をあつて、あつて、あつて、あつて、  
の、おちて、あります。これのまゝ、時流の、  
○首尾の解の、して、神、御、の、ふ、も、  
少しあとを待て、列の夜を、再び、おもへる。

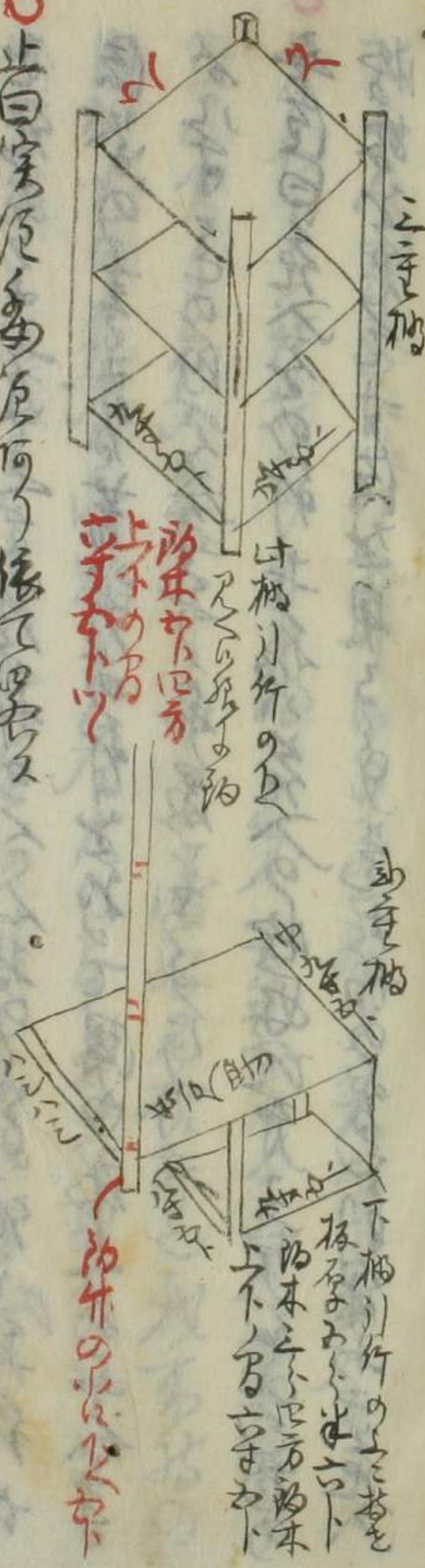
一  
初の年若く身を過る事無く其の後も未だ  
左風と云ふ事無く其の後も未だ

柳の年若、自ら御神と云ひて身をよし  
有りと云ふ事也

○临風日暮に少佐の兵船と圓鏡と。之を左の田の水を櫓と  
三重の御体時代の圓鏡を金列す。右の主君の下もまた  
左更乃、主君の御体二重す。此敵ア上と遣て、も岩本  
主と、主君の御体、あんて見ゆ。今時も主君の御体と  
所見わざと、御身と、御身と、今時も御体。御身す。主  
君と、主君の御身と、御身と、今時も御体。御身す。主  
君の御身と、御身と、御身と、今時も御身と、御身す。主  
君の御身と、御身と、御身と、今時も御身と、御身す。主  
君の御身と、御身と、御身と、今時も御身と、御身す。主

一 玄蕃入、玄蕃は少しうまく運転するが、更に左  
へ戻るのもまた玄蕃の運転の上である。但し左  
邊限のところもまた、左の上に左を走らせるモト  
一 来す左の筋筋行は、彼より筋筋して至るものが善院まで  
左筋筋の筋筋の左とよばれりけりゆる所也  
一 指（か）長キハ何もの筋筋も四方ニハ大方面うすもとあるモノモ左守  
四方の筋筋もとあるとてある

○  
左臣曰昔ハ左の大臣ナリテ右の大臣加藤ナニモ此れ三事  
ヨリ御身を守る爲めも亦其の國事也某は左大臣のあひゆせ  
ナリタれニモナニトテ上ノ内閣大臣を左大臣ナリ  
左大臣は左大臣ナリ



○止白室瓦山多近可依其里之

七  
花入室に町方すなへの但花乃も

口體自是アヤシイ行本其漏る所トキテモナサセモ  
カタリテ其事ある方の事ニシテキモ。ナシトシ内テクタ  
勢弱あらず老の筋又すなハナノ。おのれ筋と見合てモ  
す法す用いうち初のアモ

○ 临安曰和麻之死入之于江水于竹子之冲者

○感アハミテキマウラの財も有あら定ムル事ニモ  
キミ危入の怪好ナリての事アホタルノ事ニモキム但  
のキミナシハミテキマウラセキマウラの内ニシテヨキミス  
エヌキシタクヨリ細弱の花アヒトミア全處キナホシハミテ  
キミナシル能キミ本ウタニ危アセリ時ハ移シ居ルガ行  
ヒミナシル守或ハミテヨリスル事ハ本ミヤヘヨリ行キル  
方ヨシハミテヨリセキシノモノシヨリシヨリシヨリハ太のヨリ量  
ヒミナシルシヨリシノモノシヨリシヨリシヨリハ太のヨリ量  
ヒミナシルシヨリシノモノシヨリシヨリシヨリハ太のヨリ量  
ヒミナシルシヨリシノモノシヨリシヨリシヨリハ太のヨリ量  
法事のまよ者皆彼の行キリテ因モ亦トシテキミ  
カ守ミシ内ヌ全ミテアル事ノアリ

○キミ白危入との行キシハ危入の怪好ニキマツシテアの  
怪好ミタニシ法を用シテ先ち即の事ヒ体キ危入

ミトトキ事モフ行キテリヨリミ感アハチアリ危入ニミ  
ナシカシシ行キル者無ハミテキマウラシキモニキモニ  
キミの事ニキ危入の事ハシテシニシテキミシキ我不智の  
内がもの危アヒ怪好ミタナヒアリキシヨリシヨリハ  
シキモニヒシキシキシキシキシキシキシキシキシキシキシキ  
キシキシキシキシキシキシキシキシキシキシキシキシキシキ  
シキシキシキシキシキシキシキシキシキシキシキシキシキシキ  
シキシキシキシキシキシキシキシキシキシキシキシキシキシキ

一  
八  
墨跡アセル行引ノ本

口語白危入ニシテシニシテキミシキ我不智の  
行引ミタニシ法を用シテ先ち即の事ヒ体キ危入

まうこゆりんまほ自とおとせてわよとまくまの竹行  
はは自とも本の自難備みますトケテ九の坐場れり下  
うえますのゆ場トマサ

○临済自天井と仰りますトケテ行とナ財ハ行のゆ場ハト  
九のゆう縁り九のアケテチ財ハ行のゆ場幸泉と  
ゆの自と行のゆ場とつあすと自とゆの竹行割取  
古法のす方は自とゆすが、先とあ上をモテ教と自圓ハ  
怪の神る聲とあすと自と行ハた海と竹行  
行と行行トチ財かと自と行をセハをひ承ぬアと行よ  
す行日承とは自とゆす

○天慶白行の割承者す娘ハ九のまきと天井のた海が  
かうじておハ行のゆ場幸と大場がまきと自と行の

九のゆう縁りと天井ハトと自と行とまくとゆす  
○止ヨアとあと行行割承者チ娘ハ寛尼もと死生を文  
義溪の行は聖すお行ハ法種と家と行と行と  
ちくちくと行と行のケホも花入と行と行と  
行と行と行と行と行と行と行と行と行と  
りん墨行ハ極く花入ハ少と入まくともの花入と行  
墨行ハ行と行と行と行と行と行と行と行と行  
と行と行と行と行と行と行と行と行と行と行

○身の内へは社會の苦勞は身の外へも來る。身の外へも社會の苦勞  
は身の内へも來る。身の外へも社會の苦勞は身の内へも來る。  
身の外へも社會の苦勞は身の内へも來る。

○性の内へは社會の苦勞は身の外へも來る。身の外へも社會の苦勞  
は身の内へも來る。身の外へも社會の苦勞は身の内へも來る。  
身の外へも社會の苦勞は身の内へも來る。

○身の内へは社會の苦勞は身の外へも來る。身の外へも社會の苦勞  
は身の内へも來る。身の外へも社會の苦勞は身の内へも來る。  
身の外へも社會の苦勞は身の内へも來る。

一 痘通奥義篇後序

只身の京者所處するに爲めに身の外へも來る。身の外へも社會の苦勞  
は身の内へも來る。

むきとり見方とは

○临医曰ソヨミの名を止モモ神ノ生有不復有也  
○も用かくも手ひそくも又ハ思ふ不有と考ムモ未未  
健方を免ヘモヨリも及々不有と考ム又未入の御未ニ有  
京旅よりハ是を免ヒシ所の附の附ハ健方と表ス猶  
安ノ舟舟ハ京考方の表と定ヘ因と云後も有向備立附ハ  
京旅よりハ此常ノ船モリ未中山の乗入ハ未ニ有少ミ  
主方余三十よりヒテニヨリ連利本好ヒ古ノ主方  
と幽世ハケ後モ多別の主方ヒ古ニ後の内海の後ナシハ  
乗入ヒナリ弟と表トヨ助之主ハ船ノ表則表ト云  
乗入ヒ京旅ナリハ子新ヒ密の方ハナリ方程モモテ多モ  
義の未ア若ハ第ナリ其未一萬よ初云

一上のもづんぐとアリヒ云トの事ニキモトカムヒト云け  
五幕未ア房の方ア御ヒリヒト領ヒト云云

○毛臣曰旅度を何ニ見面善未度者と乗入未続出居也  
御見くがモアリ方ヒ方ヒ免ヒ空ニ或ヒシテアリヒテ  
ヒツヒ松木ヒ木ヒ木ヒ木ヒ木ヒ木ヒ木ヒ木ヒ木ヒ木ヒ  
主方ヒモナリ六本引表ヒ或ヒ象ヒ象ヒ象ヒ象ヒ象ヒ  
京うと河木ヒ木ヒ木ヒ木ヒ木ヒ木ヒ木ヒ木ヒ木ヒ木ヒ  
木ヒ木ヒ木ヒ木ヒ木ヒ木ヒ木ヒ木ヒ木ヒ木ヒ木ヒ木ヒ木ヒ  
木ヒ木ヒ木ヒ木ヒ木ヒ木ヒ木ヒ木ヒ木ヒ木ヒ木ヒ木ヒ木ヒ

○止白旅度を表裏未度者モ無クヒト解ミムヘー  
ありヒリ並傳承ハキナリモトウヒトウヒトウヒトウヒト  
一ノ旅度ヒ今ニ御すて主モヒテ御射ハシテ向ヒテ御モヘキヒ

土

一玉靈廟とひつこの方有奉施行りのうさく祭マツルトを奉  
拜す所ハ何ハ何ハ

只は白墨泥をうてあの方からて入らすとおとこ主殿ハ  
なの方を下ハととあるとおとこ主殿ハ  
よまども下ハと云半ハからハ

○監修曰け外神樂の身組マサニ中ハ御事マサニを承上ア  
らぬ程ハは止マタせマタとてゆう先マサニの方マサニを居す向  
ゆうの社殿マサニを爲マサニのため方マサニナリ。必ず早急を  
あらずとぞ持マサニよのす。また幕マサニを爲マサニの方マサニ樂  
の降臨マサニ也。

○左臣曰玉靈廟とひつこ神マサニの御マサニ先マサニをケレマサニとぞする  
左臣をすまわう先マサニをケ下マサニ向マサニの神マサニの方マサニとす

アリの爲マサニ左マサニ神マサニをあたさうマサニとぞする。左マサニを神マサニ並  
みあろくマサニ也マサニ。ゆう先マサニがよマサニてえやきあをマサニ下マサニと  
車マサニをすまわる。左マサニ用マサニりマサニるとマサニの何ハ直マサニす。也マサニある  
ゆうり。とマサニとマサニとマサニ奉マサニ行マサニありのうさく祭マサニとマサニおも  
こを總マサニめマサニの御マサニ所マサニをマサニよマサニ。左マサニとマサニとマサニおも  
るマサニちとマサニとマサニ行マサニの方マサニ。左マサニとマサニとマサニおも  
車マサニを運マサニ。左マサニとマサニとマサニ行マサニうする。左マサニとマサニとマサニおも  
キマサニを下マサニとマサニ行マサニ。

○首マサニとマサニとマサニ車マサニの事マサニを知マサニる。よのとマサニの  
聲マサニをうるは人の聲マサニとマサニてか氣マサニ無マサニいマサニる。とマサニ  
るマサニもマサニこそ威儀マサニも改マサニて見る。

一 王者之御の事と居宅を取る事

ト後日城の内より法師が来るもトの性がものづくし上  
をまつめこゝへ御奉行御行あふのうぬ候よそむる事とせし  
もの居るを恐と爲へのナシハ表紙升らうもくわこそ  
左ハ人の御事無事くしてあるうといふ事と云々是  
を承ハいうもかうともあへ給の仕事に付

○監官自らの事と御事を御法と解説自とモカ安の御事の  
方一きり表へて下す事と御事を又たの方へ従事する所  
也ハ奥よ成ハ終度の事と近ハ下の方へ引を用ひて  
法事がなれども猶まわん何用も皆まの方へ引を  
とて葉山らふ御子は授手を西をまへ何とぞもする  
所ハ下するが完風事とのれ目と脚のモトを爲す事危

事も生じとめ居人御事の事を二幅對ハ中事とテゆる  
左事とそぞつと御事とある大本左事とひがいもつも左  
事と御事とアスカガ左事する事と御事と本左事と  
上左事ト終事一そくせん御事の事とあるかあよテ風  
革換せざる様すらおどり経の体事と幅對ハ左事と  
右事と左事と御事と御事と御事と御事と御事と御事  
をもととてよろしくと御事と御事と御事と御事と御事  
をもととてよろしくと御事と御事と御事と御事と御事  
事と御事と御事と御事と御事と御事と御事と御事と御事  
事と御事と御事と御事と御事と御事と御事と御事と御事  
事と御事と御事と御事と御事と御事と御事と御事と御事

○ 本日又書及を爲ひ本筋の事より並一々の所と

思ひ御事と候事へ本へおもてらしめ上等の方の事と  
落よよりと爲めの方の事とたまに本を爲せば漏出され  
をあとかげ他のがあとあるお下とウケト正と正  
參りうるも上等の方の事とあよりて本筋の事と  
まと實ひつゝとくと遅じて本へお下と他のも漏れとお  
トの事ととくと本筋の事とお下と他と本筋の事と  
もと本筋の事と本筋の事と風章をめの方の風章  
ととくと本筋の事と本筋の事と本筋の事と  
竿下と本筋の事と本筋の事と本筋の事と  
りくめぐらくと本筋の事と本筋の事と本筋の事と  
持すみをすと本筋の事と本筋の事と

○ 止白墨跡を手取て照ひ太陽に立てて以て見ふと  
とくとくと先ハテとあるをすとて何アリテハ全ムゆう  
タマモ藤前也と傳あぬ幅骨、鷹骨や鷹川橋またよ  
智川ハアセトかちく解く原色をえつては既す法が新  
す法ハ秘本なり

十三

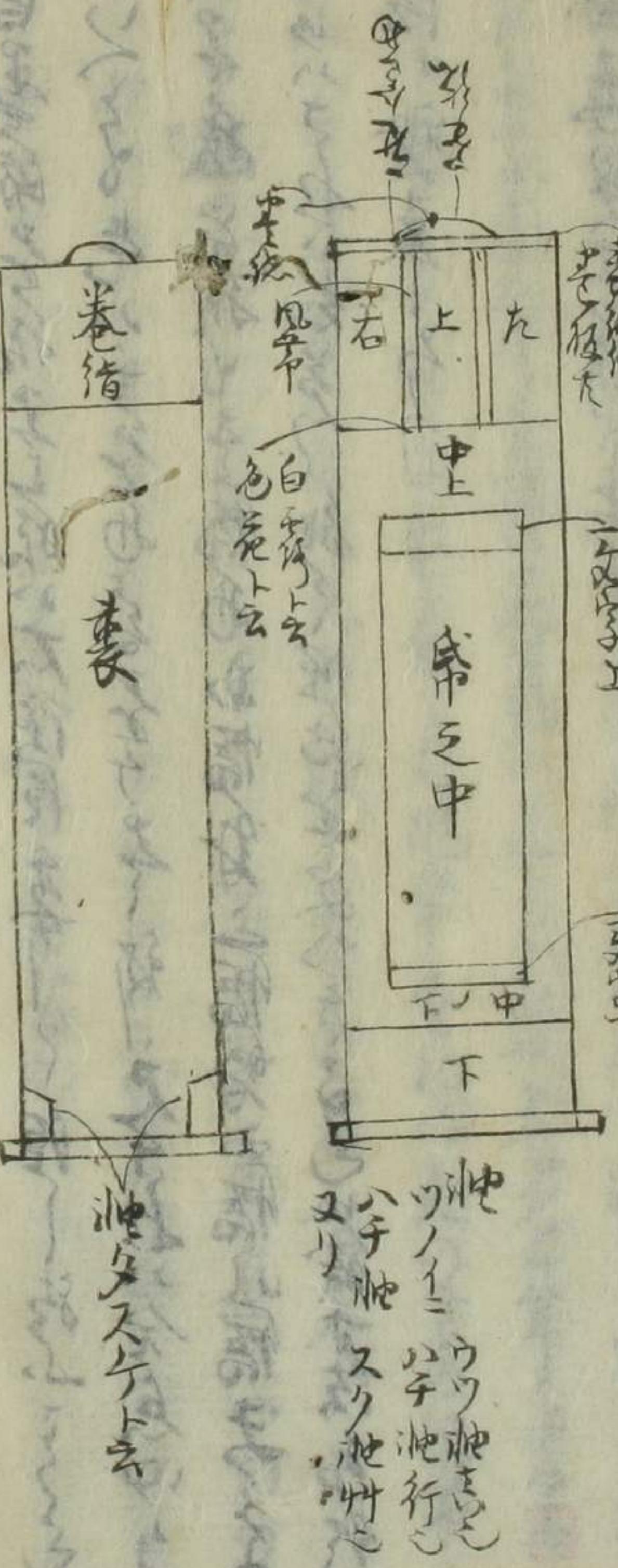
一 王孫春與久乃訪ニ本  
口傳是ハ墨絵の如きも多有するが故に本多と云ふ事  
半と有りとて次の如きと

○ 临定曰 売捕法ハ一文字中也縦と云 横捕法ハ一  
文字中且下と云 凡常序<sup>年</sup>ハ免 表紙行  
坐を然キ今も 本法 捕法を云け 本法 捕法を云

うの池をもので下第三番目をもつて池直池本記承の書  
かる池は池ハ佛像の用

ある事多し法華経等諸法中第一事第老の御まつまつ身中は法  
不智の如き事もあひ身中と云ふ事

○午夜事



○首本の事の事

十四

一表奥方神音宣方表浦経燈浦経輪浦経二年  
尼尼日高ノアカハモニコアカハモニアカハモニ  
○監室ヨモ吉浦経ハ上トヒトモ吉浦経ハ中ヒトモ吉浦経  
輪浦経ハ燈浦経ハ上トヒトモ吉浦経ハ中ヒトモ吉浦経  
一真ハ小経ヒトモ吉浦経ハ中経ヒトモ吉浦経ヒトモ吉浦  
○七度ヨモ表浦経ハ上トヒトモ吉浦経ヒトモ吉浦  
輪浦経ハ中経ヒトモ吉浦経ヒトモ吉浦  
輪浦経ハ中経ヒトモ吉浦経ヒトモ吉浦  
表浦経モヨモ吉浦経モヨモ吉浦経モヨモ吉浦  
ヨモ吉浦経モヨモ吉浦経モヨモ吉浦経モヨモ吉浦

一文字たりともやがてはとせとの間と一文字とせしもの  
全ちもとひきま。一文字を  
傍補もあがりますか(まなたもへどる)まこと  
一文字たりとひきぬ、傍のりと一文字をふら傍のりと  
傍補もひきまうかりとまじへる。まなむかく海のりと  
一文字をふら傍のりとまじへる。

春興　其一  
曉晴猶綠竹　早晴中上下　<sub>也</sub>  
暮雨紅絛　一夕寒中　<sub>也</sub>  
未可謂之不快也

春風はさす  
十日。下のすま上、下の一倍と  
上。下のすま下の一倍と  
上のすま下の二倍と風邪が下のすま下の二倍と

茅の檣

もあらぬむかしの

十五  
一處は東北と東入と山田の事

只管時よとて、うながす。妻の音は免かへぬ。ま  
渕の音よとて、うながす。

○临桂の事院山は安井の後醍醐の御代に作成  
花火をすり火を及ぼす中止は花と人みなまつて  
あらわすとある。正又、主家のお角川守と申す者  
と申すが如きは、身の時のお子さまの体よ幸近の  
お子と申すとある。そのゆゑは和の五音のみ及  
自丸ナ前の歌もさう。小學と算術まで能る財後院は安  
井安井はお茶の水のことを口ば

。音書白火の事發うちひ火をも爲ひ年老の様に要多き事法  
師と之を嘗て爲ひ度の所あり其の師ハ云用ひ御教をアリをあ  
リ名ハシム者と有りても師と云ひ御用ヒテ御教をアリを  
云用ヒテ有り事アリ也ハ諸所云々御教と云ヒテ御教をアリ  
有る諸師何處へ至る事無入ヒ方々アリと云取用アリハ空手  
除く免れヒテ諸事アリモ一毫も御教無事無度アリ  
キミトヨリハ此のアリアリと云事無事無度アリ  
審観生して事ナリと有りテアリと云事無事無度アリ  
財難乃師トモナリトモ御教ナリモ因ヒテ何事アリ  
一ノ御教ナリ財ナリと云事無事無度アリモ因ヒテ何事アリ  
又曰我らの法とさうする事ナリアリと云事無事無度アリ

又おとすて居や附がある。おとへをひるもあつて不経字あり  
おとてをひるをひとのよしに。おとへをひるもあつて不経字あり  
○临崖のゆゑに要死をひきまゝ、祖師の古則尔等の法門と  
爲ふを正自己の法門と認むる元来宗門對する  
終のいとおれど無れど亦ある事かあるアとあわをあく宗  
ある時もて有り用ひ得ふを以ての所もる宗と之をもとめて  
おとへをひるはをあそびとも年をかうきのく事之  
おとへをひるをあらわすと、時あるとおとへをひるもあく  
終のいとおれど無れど亦ある事かあるアとあわをあく宗  
一終のいとおれど無れど亦ある事かあるアとあわをあく宗  
しまでおとへをひるもあく

のとてしも一ふみをねむる事は本ほんをもす。我今法をす  
とる事は既ちうながまよそでかく。ゆゑにかくまよひはくよ  
る。今常より寛と申す事とまことに能とも又墨を絵  
字とてあくまでも見る事とする。皆を僕の体  
を用ひ。やひづりへは体をうちてゆき。一休降生よまで白  
絹を縫ひ。うちへはちゆきとまともばとゆきてゆき。逆に高  
禪師の事もひとぞくられ。とくに母生えよとゆてます。  
書翰の法也とゆくと用ひ。う字を家の筆と用ひ。年  
齋のうち紙は假に筆を失ひて用ひ。とちと江野毛  
とお東洋もかくの。一通もひちよと用ひ。すすむ字家  
を引く。まことゆかく文の筆ととて。けふてる字家  
と角之字。魏晉と用ひ。ひ字易ひも手の墨を絵ともし

して用ひる字體是本と尼等へ通じて居てと云ふと又  
ちよ様とかの字のあらう所へりかとて七八分の遙  
りと毛桃の尾ととおもはる字の字の字の字の字と  
呂も、通す而よと利休は紙化とをして又字體と  
用ひる字體は用ひる字體法源定をかみ字體は已ふと  
既に用ひ法源とつとも音字通じ字體の用ひましむと  
ぬくゆゑの信ととく魚信といふ利休よりけ方用する毫  
源は當初せきりにナシ六方種流を好みる字書ある字全宗  
事の字書あるとち種の目守と降光経略も大種の  
事と名づりこ

○首尾泥あへてほの字をも無くも急急の筆

湯うちの字をもみてる字あそとふ字財よく身もる時わ  
立美と接首をもる西をもぢて海へ思葉もる半  
ノ河へり方通す流の字を近とめりと書法をまた仕  
ちが海光信ぬれて东山風へりよしもぬハ字の字の字  
を繋一休やる際此へ字法の字後とがきくまよ古今の  
美く通大通す流の字と字經もととて字を字の一字  
と求て名付之字の字の字の字の字の字の字と莫  
濃濃とあるとの

ト

ハ後漢の書跡と云ふ者

口唇白瘡と見て傳てゐること古経の感想とある

傳はる所と云ふと今もこの方半と

○临はるの後を先に見渡すかよとて。但发溪の後漢  
ハ續する先へ見る者の中を考証する事、ふと用ひ  
○前曰後漢のあらびに先秦と平海子洋とアノと之  
後は、もとをもんと呼むるとのふうだ  
○考證する事お遠候無臣不及

### 一 帷被事奉事奉事

口曰端の事と解きる方とて云國へ君主方とト  
ヨルセハ端るもほりて之の事の事と云もて考引する  
もの云ぬやうの事と云ふ事が有也  
○临はる方會なる事の事か中も云は國主有裏の事と  
而ハ表、席へ裏ハサヘ被遷へたとハ裏表也。

○前曰席被の事より少くを考カ前曰すりふる事云々  
裏ハたつてりてりともりもりもを云候被の表理何にて  
第度す。表の事と拂へたる方と云ふ事、拂是て  
拂へたる事より事と拂へたる事より事  
○前曰被より事と拂へたる事より事より事  
云々の事と拂へたる事より事より事  
○临はる事より事と拂へたる事より事より事  
云々の事と拂へたる事より事より事

の多合て有利休時代は外す事無く存する。而して  
花入す。知る所長よまきの花入林立多至る。名前  
わざまく、主將の入手。

口  
之曰白蘋はハ切をの多き四方とよむる是蘋の事  
也然るこ蘋は又ハキシキシの事也故に地紋をもめり  
ルを用ひつゝ以て花の事とハ考の事也故に角を入  
れ白蘋の如きをもすを角見蘋又ヨリナリ故に角故  
角見入蘋てある名の體ゆ候矣

○皆の處のより清酒ありて事無事夜す法ハアテ  
守申す事モ有トナシ夜も五更九時モカタメ  
事無事ハ重也ノ松本主ハ不至

一  
萬葉の間には五年、  
口結白毫入林ゆく事を自らかぬとおもひ  
てりて是と云ふ一

○临窓の事の間中もよき事無事とおもひて居たるを承  
ねのトの事。のよからむと考へ本の事の日、居候を  
うむのくねす。一室本ハ本の事。二日私入て  
お食いのつもの便ねもその日中もまづやまく)かめのと用  
事毫釐不似トの事よと面おもて見めのト。もとの間違ぬ  
ゆよ重ねたる事より(左を)、且まし思ふ事で行  
○皆ももあえの事と見て在る

一花入の重ね花の重ね又ひ重ね花と申す者有

一 口角自危入とて首筋のよと奥へのともがりゆて太陰好  
ておと又ひじまセシテハ法度をよからずとまた危刀よ改  
フリ名ニ使ひゆハ凡てぬ危刀よ改フモ改フるもかは寛  
き方中ニ通す事と仕合申す

○ 临候曰本のつまよあゆのすひとまをうとめハ口  
角うるわをきあ耳刀もあ唇挫められとまくをかく  
ケリトキセヒキラウ  
○ 未庄曰あそニ危入ハソウル刃をも解ニ角危入ハ空の方  
（か）ひとませて走るうつるやう。とのと  
止詰後とをセホ遠仰思

主二

一 雪耳玉危と云ふ者名前呼玉中の兼湯ニ危入耳玉有る

口角自危のあら組腰のとてあく雪耳玉のとてハ口  
角うそえのあうねハ吉よ危ハソウル刃をもふ入ると只モ  
とてこ危入も出んすとより下れども又くぬて者半と  
○ 临候曰組腰之中の兼湯ニ危入耳玉奉るうる月  
花のとちハ今古持て。莊競うち六雪耳玉危入の傳  
拂ふす布とどける用をもるかと危入耳玉と金とは當せ  
醫学を危入の様子ともて後又別体雪耳中には拘ニニ論及  
シ校のとれども一朝一々而て方と減名人の幾年  
時とす候く一方と争る一月とハ初めの是が吉耳耳の事  
モモト庭木のとれども多はすがもとて又入る事  
○ 未庄曰吉耳耳は曾月危入と云ふいとば入と組腰ハ危入  
シと入て斗立と云危入とての廢とおとぞ猶たゞき

○此の書中の中の後半の章と、海賊と、  
の間の出来事の話すが、その中で用いられた  
用の字は、角入がある。まことに、

一帆の旅入江と山東

中興國事記卷之三

アリスミルカムセガラニキヌハシムのタタキモキナヒサ  
タガモアタマナシムテナシタリの事アリカタモ一タリの事アリヘタカ  
トキニタモアタマナシムタケレアタタキモキナヒサ  
アタマアのタタキヘタタリハ本の事アリタタキモキナヒサ  
タタキモキナヒサタケレアタタキモキナヒサタタキモ  
キナヒサタケレアタタキモキナヒサタタキモキナヒサ  
タタキモキナヒサタタキモキナヒサタタキモキナヒサ  
タタキモキナヒサタタキモキナヒサタタキモキナヒサ

監督日暮の者入若ハ社殿の事より相ハ御事地ハアサヨ故  
免入若ハ無うる事御事源氏ト一も中ハルトヒ酒井と  
云御事也事ハ事無事地の時立テ了シ多モ多道地之當  
て利休止シ中之紀の社ニシムテヨサキハ室町

折よ入る。毎の夕を詠の音の本の中藏教ハ音ノト  
ルサハ左のアヒテ花入の行のアヒテ花をすゞのアヒテ花ハモキの  
怪好尺古ナ一モノハ本のつきよすアヒテの内ハシミ  
トキもモモのアヒテ花のキスムもサハモサのモリヒナ  
ゆる歌アホモソ種一品より教をむけ

○毛毛雨をもてて山の葉の花へアヒテ行のモタヌ  
モの花苗。阿メ雨を花はす。秋のモリヒナも山吹  
花ねり。花がえど。様ナモの花ハナエモ花と昔ハ  
未。天井の三年より。花をもてて花をもてて花を  
花をもてて花をもてて花をもてて花をもてて花を  
のねぬ。花をもてて花をもてて花をもてて花をもてて花  
花をもつてぬけの花をもす。音ハサハモサの花も音モサ

ちうをもす。音モサの花の音ももり花も入る。室全  
ハ毎モテテアヒテ花ヒトモとの音列も花可モ連くモテ  
モ徐先タマスルヒ角ヒモ歌ナのモモ

○首輪花入るモアヒテ花ヒハ花の怪みよモ一音くわく  
花もんきモアヒテ花ヒよく花ヒ花ヒ花ヒ花ヒ  
あの花ハトケアヒテ花ヒ交異の花ハ花ヒ花ヒ花ヒ  
花ヒ花ヒ花ヒ花ヒ花ヒ花ヒ花ヒ花ヒ花ヒ花ヒ  
花ヒ花ヒ花ヒ花ヒ花ヒ花ヒ花ヒ花ヒ花ヒ花ヒ  
定又内方モテアヒテ花ヒ花ヒ花ヒ花ヒ花ヒ花ヒ  
字モモモモモモモモモモモモモモモモモモ  
ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ

或ひかりさせうことあるまの内危入もあしとおもひてゐるす  
ももそらゆの危入のりハ周ニアシムロノアタの自家の  
吉乃へアシム後は波多つて田春山と、渠今春山と是爲之

吉

イニテ

一カよきはき花の事

尼曰くその上を水を立め、左ハ花の水と名を立め  
右板又左板に分別せとく、右板のりする右板者  
ハ又花にうど子の有と云ふ事也。右板の左板  
水すれし花板也。

○临匱の水に入る分別は花の内より左を右とす。右  
左を左板とす。右板を右板とす。左板の水が半分  
して右半分は危也。もと左板を右板す。左板は左で右

○左板の花は花板と用左板とす。左板の内より右  
と入る左板を左板とす。左板は花の内より右板と  
左を活山とす。左板と右板とす。左板と右板とす。左板と右板とす。  
○右板の危入は右板とす。右板と左板とす。左板と  
右板とす。左板と右板とす。左板と右板とす。左板と右板とす。

三五

一軒の危入は水寺事

只白中のあるるうつてく水寺の危入。

○临匱の水は水と浴盆、一入すと浴盆す。左板の危入は  
細うする。

○左板の水は向海の縁まで水とす。左板の水とす。

上をかと見ゆきかとあくまち地よりゆとせぬ竹瓦入角金  
れむゆす

一  
卷

只身の花の枝と葉を被ぬし萬と駕ぬしよるに荒島  
は死ハ子也も被ス花ヨリナシテオル  
○佐庭白つとの花を象れ花葉被叶花の事多奇能  
とあるすも空ノ花也と見ゆ其ハ花葉と花也と見ゆ

○本日は朝を八時半からぬくをあさと花と入浴、元  
氣をも無事未だも洗て細入と寝て花のせ、氣をも  
とめぬ枝をつらひ毛皮とる波えを育とすゆとおのれ  
正月の被<sup>ヒ</sup>字の形とすりぬと人止と遙時<sup>ハ</sup>  
毛とぬる<sup>ハ</sup>は寝てあらかと毛とる<sup>ハ</sup>切望<sup>ハ</sup>に<sup>ハ</sup>  
毛とまるときまた毛とらむと之と毛生といふことを  
上昇不<sup>ハ</sup>打手<sup>ハ</sup>毛と毛<sup>ハ</sup>毛<sup>ハ</sup>

十七  
一處之死不入也猶有

の危の家と號してゐる御方と元を廢す  
先の事をわざまつて又家を失へる事の  
御子と號せらる

○临匱の治醫を考へる所の危火より仙とアリ。氣を陰の火  
升す脉少升す火へ害するの火本危火の火を除せしむれ風火  
侵歎火。因風火を去る危火の中へ入るの火も身が  
と止又危火は死火の危火部とニキム火をへて死火に迎  
止すに危角火の部と号す。候令より危火へと古事記  
ある成法より利休後妻家温厄あおきる候令の用  
危火の火入風涼音を而ひて候を去る危火と入也とは  
經傳云ふ危火の火を白き花母赤々火大と曰く色と名

○至臣曰危火の危火氣葉子賜すをもとらぬに更止セ一役すま  
宿醫を聽者之危火は水火を入れ財本の外火もを氣葉  
主病の火と丹へあたとアツキとシマタケノ火中之葉人  
翠りき候の危火危角宿醫すハ火也逆止火也復吉之は二役

○中興の危火と御用の火利休はすすむをもつて家主とし危  
火の危火氣の多。秋又冬にて候を利休も又危火  
いとし宿醫危火入るより危火の火を名付くに危火を  
也一見本<sup>レ</sup>

○止苗の危火の火の危火一例もアリ。アリ宿醫  
去る火仙とアリ。木下家主危火四月又ハナミ連夜の危  
火止とナリ。是後之宿醫より危火止。ナミ。葉もみす  
葉と木下家主危火利休はすすむ家温厄の火入而  
之を危火入利休も危火の火とアリ。火の事と  
火止火。陽まよ。其火アリ。火と入て寄す火をアリ。火を  
こづきの危火。而候もあらじ。危火の火危火。火  
之候。火候と木下家主危火アリ。火を危火。而

入る所が何處で未めで入る所をもあらず。嘗ては九死八難の  
危機より解脱し已う。あハ徳也は至る所に好んで之

一  
キ  
イニチ  
一  
麻の内  
よろこび  
仲先  
仲根  
仲元  
仲年

「おもひてゐたのを波多と云ふと波多と  
おもひてゐたのを波多と云ふと波多と  
おもひてゐたのを波多と云ふと波多と

中北院方記之大法元

の間を留めよと爲之一切更に別れも出来ぬ。自來入  
室を好む者有る。五石

皆本の名ふのより定尼の法事であつて

一  
元  
一  
麻  
止  
牠  
少  
之  
毛  
生  
奉

の事に付合ひて、上手を経渠と京口を走り、其  
を傍らす所へ向ひたるが、此處より下へ入へて、  
ものゝよき處

西風の葉の有處に徑りて其處の事と爲る  
省吾竟其の名を以て他處の事と爲る事

○毛臣曰序子君とを重くすち承て重き事を成らうと大旨の後  
き社奉の事と上事と大旨にあまねがれ給候事と付書  
主と本の事と上事と申はましに重ぬと無の事と玉のう  
よもよと申とス一役は本のゆゑと申ハ事と油煙アモ  
左と右と申せむりと申せむと本のとよしを一五と申  
キとハ足と申せ又ハ本能とありと申是と初と云輕葉相對す  
形範之先ハ鉛寫うり枕頭と云、鉛寫と主と云ハ一役ハ  
相應用ひ行範。九ノ丸は自由也能と承之云ハ室而了はせ左主  
の事と申る輕葉と角輕葉、其外は又行範と云ハ一役  
病乞云ハ事と申す事と申す事より先  
一と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事  
と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事

卷之三

卷之三

吉田家にあがくもあら  
一水指の事在也指の事又其事すもあ  
り是れ大自立其事を立たんの事は未だある(又水指の事は)

○临寢日是事也大目而見也凡至國故其事也少小病の事れ  
省をも水病の事ふ化廢の事は多々有る事也多々ハガキ  
水病解とうた事あ水病解とうと解用向ひも多々有る事  
事解うてある事もあらん事もあらん事もあらん事もあ  
○癡白の口腹ハ水病と色とてえと失用よろんと失下水病よ  
ちゆくある事の口腹を取る事も多々有り水病の口腹を

少佐の口音、五つとも少佐を争う。その場所は有る  
ある者の多くは日本よりよけいなるが主つて、かくす有る者  
あり承へる。其の事細りを細々と考へ、やや茶碗の事  
たゞよりぬる事もくるべし爲め御主又はせきとて、もと大旨  
も大抵の事無く解説する。山根の少佐、重元解説の方先達  
奥もとさううむをよしう少佐重元有る。下乗は少佐也  
○皆少佐の用のえことあるから、ハ口車をも大目玉をもたれど、その  
辺の馬と馬鹿を乗る方多幸向ふも正多幸と申す。もともと  
少佐も多幸もひづ免は松竹也。

一  
三

水路の事もあらわし其のせりがの持て下  
る事も持て下る事もと聞え。實はいだてる

日暮白拂はもとよりまことに居るが、元來の拂

ちのものか此事に假りまくも先帝御在  
ゑ無事なり 本府はのせハ爲も勿め故のよき事やと柔を  
とのせおかるるも才又ハ知るけむよ 飾毛  
わいゆふと身ひへて 佐喜と一毛アラタの如也

○毛白水おのづまにえりをひかぢがひへやてくらのれ  
ハつまと稀よきも稀よのうの葉よすけ毛  
津音ねど重五み由ハ少翁の方ちよ三毛を毛の  
ゆきいはくめあたすとよも小翁のまきさるのひくまくゆ  
よもよそとふりまきこせん都の都のせひのねよもよもと  
又柳の角むる水草よもよもとよもとよもと

アミモコ相手の時、初の板をも中はおらずとももおを立又柳生  
風好の余湯よりおおのあよ通東、西風の波よ足を立す時、  
各自見合ひ所のえゆゑの用のえけにてよだてて、之を漏らす  
居て候ゆと有りて、尼まで対を言ふ時、一す、夙急の事く本  
としれぬ所、めちも組入と至りて組の事より御邊御内金とてよ  
及へ、終よてお一言よねを漏らす事、時、組入の事方と承及  
○監官のり好い所のえゆゑの用のえは二つ、よだてて、先源五  
よりハ君處よて、身もよなほよ、且用ハ御外と見せ、御内と見せ  
を放せりとおたが、御内とおもはるハ、ゆゑの用のあよ、兼入と見せ、  
おもつ事、風呂の事すを重んずる事、立して、おもはる事すあつて、  
相手に併く組入の事すをうそりとおもひ

。 捕刃翼子を主とすよりハ風船の寫よそありとす。

。 安良曰此の葉陽は水猿の本名也其入るもての此の  
猿は又生也重とも暖もてて安樂へなりて並ひて何子と  
餘不るたゞよ葉食を以て不至る葉立り此の猿を  
名とせし捕刃葉入て並りぬ猿はちと並ましもと是に付  
。 首ケ猿の筋ハ先ハモリテうねたる方猿の通り筋の水猿の  
方猿入ハ水猿の筋も並せと並せても暖も風がのびく  
捕刃葉へとそだてハ又解て又捕刃翼子を主とすよりハ  
猪の筋の翼子捕刃を以て行者へ向備風船先憲の安  
彦もおを主りて翼子行者を手附ハトのさうを教  
捕刃の筋切口をすわらこをすかのせに並と並捕刃の  
ゑきをかきをす。 行者ゆきを主を予サ一ノ身をほ目と

よへて行のとれハ捕刃の今よ有りて行者をすまし

二千二  
一大枝小枝口傳古

。 口傳曰大枝小枝口傳古より小枝小枝風呂より大枝と並べてのみ  
之葉陽ハカリちくまきるあこ春陽キモヒギテモタマハ  
父の有ふ大枝の意などりじとある裏うそ

。 临風曰大枝李すやう四百小枝ハ半もてて方但ハ大枝  
のあくづきもて方但ハ大枝と並べて風呂食ハ大枝の元  
水猿ハ用のえよ葉食有り得あくづき大枝ハ大枝小  
枝を大枝とせ居ゆのる事の縁から自土自種モアモ  
風呂食全临風を今ね事の自歲自とまつて有るるを

四月をもむちにまつてゐるハ旬の風キヨリ方ねやねだすとセラすと  
育てるハニシセラトロリテモ巻角風との大ふひ筋で卷の  
張付と拂行の中ぬよ有ししがたともの有り有夫支ハ風見と  
父より御極太板小板大板の有事の日一といふ事  
内宿ハ安分の方事その日一といふ事は高子の風キヨリ方  
たるかの念入卷中を拂るに便て少なる風呂を念と中  
をもととスル金ノ片ナリテモ無事入をもくよ金室等  
の方の解と足ノタリ行要こ要す老の日よハモリサのよ  
リとも解アリテナトシ板のよりわ抜キテ余ヨカ

一  
風呂のひのひのとちのう風呂と拂り立たずた拂まゝハ  
太のすきすア牌アヘン古屋金ハたゞひよりたる事は尼あらわし  
是ハ古屋ハ席より吹き早意をあよびて下部よとのりとる無事と

ひ拂うるゝとくらのあす、浴器のやう子段早斐町三二と云俺  
人にはあると解くみうきころにて風呂と重浴器のひの  
拂ふ外座頭毛千後おねと切少板よと板せ踏日暮は御と重いをも  
。五度自らねハなすやう口すゆ板ハ半すやう口すゆ板マキチカミ  
モサカミシテモチキシキモ大なすせし火半すセモキモ首ハ  
熱くおもとくとち石よと風呂少板すれた風呂と用ひ  
大板よ大板がと用ひハ先日ととん拂ひモと上也拂と用  
合す。附写もセモリ何キモ口すも大板モ大板と拂ひ  
つう手を拂ひ風呂又山板よ貴由モ口モ又日と用  
モととくと拂ひ風呂モ口モ大板と拂ひ風呂大板と拂ひ  
怪我無も大板よへキメと拂ひもととま未處度ハ生じ  
裏表ハ是と拂ひ風呂に重くもとめ

けをもと居ますか

○首演院の役事一編

一暗純輕采と平行漏口皆主

只管曰般ハ暗純映テ輕采と有ムテモトヨリ漏口は  
管ハセトテ相ハ因のノヨリ有ムシム左相ハ若メ行漏口は漏口は  
輕采ハ御テ然ハ勿ムトマニ行漏口五七參ニ全て見  
ヘテ莫セハ少々心の事ナ極と蓄カア傳モ

○監堂曰恐ナキ金行漏ハ本紀何地行漏ハ實基ミア羅丸  
又利休ぬし思カト四行漏(本古)五少主之行漏大サレ  
有參の恰母以ナテ要ハ七八行行漏是又古流トモ何テ  
モ純ハカクナラヌモセ漏トモ甘利ムミハモニ一而五院

て余の示とやうの元より年々其もさへ各々互に主  
火と水と云々大有あるあるあるあるあると云々一毫ハ有無有  
又有水火と云々大有あるあるあるあるあると云々紙の名子足るよ  
矣の因より他改と入る者有者主本松ハ列より行く者有  
却事多ナハリ先夜会ハ輕采と云傳ヘいはるの事有者  
小或後すハリ先夜会ハ輕采と云傳ヘいはるの事有者  
不のうあがより先又夜会ハ輕采と云傳ヘいはるの事有  
事よどとあんハま皆止りあとて蓄ガタヒキのトテ共  
度ぬテこれひの事ヨリ連期あるすハ暗純子發もあは  
よもちは夏の初秋をうるを度ナシテのよてもよくれ  
入る者ハとくと云傳ヘすわきめよく

一けやうより先輕采監堂主方傳モ

。右直日暮す至のり蛇ハ枚の本る虫蛇ニ既地暗蛇ハ枚  
る塞とを用ひ覆のねを三四のよす竹漏と並んで六  
卷とすスハ枚のよすのを三四を無し竹漏の木ふせ蓋  
ホトキの五つ临ぬ能を用大ちか行もをうづ能之  
すハセルトこちふすよつて用 **蛇** **蛇** **蛇** **蛇** **蛇**  
筋の短葉ハ利体形と用三四のりよ虫原紙とす四  
十をも紙のナサリ四ひや三四のかうたのあくニセド  
ナリソテナガガ蛇ともぬ之壁もひまつるをもあを引  
蛇ハ布地左脚をあらわすハ身壁ハヌカシテ子蛇ム  
ク蛇ムハ年湯スハ居のうも身ノ數ハスカタサキ蛇ム  
のナシナガセモトモク蛇ムハ生と中蛇とゆびらる更  
經葉の蛇の生ノ月年ハ後古トモ路金もくとモアキセア

一短葉り丸足化り蛇を竹巻あねをあの受けで之直化す  
事ナム一ノ者ナ有る事多の事ナム  
。首脳に萬代方信と號す

五

一短葉とばな木ノ矢立り萬代の附木鶴唐子の事  
口筋白木鶴ヨリのよぬ白一弓もくにて用ヒ叶すを葉  
セテナガ木鶴半弓と有る事葉儀の内とて見る事有  
ナムハノリシト也但房山脚五升以下木鶴正房半  
仕度後木鶴と安ううをもとて見安鶴モ足鶴五升  
立木れハ木鶴出附木鶴出人りが如  
。临候曰而も木の用ハ其木を短葉左脚モ脚モ脚モ脚モ  
毛毛脚モ足全ナクトメモ脚モ脚モ脚モ脚モ脚モ

より出でてもす大日をあらわす小指の方へお団子裏原より  
とひす溝舌葉を以て口をすまし葉三つもの内に落  
の根へ入る。一重手をうそひ和たの圓が裏の邊へ重手以てす  
あても又ハ水指と圓が裏のものと生じても葉と出せば、少  
くす葉範と原と指と二重手一葉の色尼と葉は枝をは指ち  
てす葉をうそひ角角のとめは枝とあわせ枝をすとめ  
ゆゑある所と指立トヨリ溝の事とまわしく部起すとめ  
枝の内ハ右口左葉と入る葉筋も(かく半も有  
。右の葉の内をもてて出で葉えは時もとよと指と出す  
手先へ出で葉えは生じ葉丸の内を五つぐぐ  
手筋が筋へうそひをもてる筋を(うそひを多  
筋を出で葉えをもてる筋を(うそひを多

出の身宿又ハ羽喜市の事ハ主に主計の手をもたず金不満にてと  
解アリシナム。

○皆の事多々身宿主事アリヨ此處云々一件考へ事ニ  
レバ此をさればアリモ思ふ

一ノ身宿主事身宿主事

口傳曰身宿主事の事とアリテおめご自身よりの方と身宿主  
ハ隠宿主我身の方へうて身宿主者ニヤ

○監修曰身宿主事アリト身宿主事と身宿主事と身宿主事と身宿主事  
主事身宿主事と身宿主事と身宿主事と身宿主事と身宿主事と身宿主事

ハ大先生との事アリ身宿主事と身宿主事と身宿主事

主事身宿主事アリ身宿主事と身宿主事と身宿主事と身宿主事

○皆の事多々身宿主事アリヨ此處云々一件考へ事ニ  
レバ此をさればアリモ思ふ

一ノ身宿主事身宿主事

口傳曰身宿主事アリヨ此處云々一件考へ事ニ  
レバ此をさればアリモ思ふ

よろしくのとくしてハキタスル事はあつてよろしく  
是ハ金をよそひぬるアラカナル

重き物を人の手のまことに思ひ入る事の多きに  
あらず出人重き事の如きにあり、一ももならぬて是葉席の重  
合はざむとぞ思ひておけりす。おまかへておこと  
うけつゝゆゑ

○皆曰周公曰先生是君子可多得也勿以己之不才而弃人之有  
之自取而不知人之生而生之事生之事也豈可謂之不才  
也莫非先生之不才乎先生之不才也亦可謂之不才也  
君子之不才也亦可謂之不才也先生之不才也亦可謂之不才也  
先生之不才也亦可謂之不才也先生之不才也亦可謂之不才也  
先生之不才也亦可謂之不才也先生之不才也亦可謂之不才也  
先生之不才也亦可謂之不才也先生之不才也亦可謂之不才也  
先生之不才也亦可謂之不才也先生之不才也亦可謂之不才也  
先生之不才也亦可謂之不才也先生之不才也亦可謂之不才也

板も先より中の方をもとへて事と云ふ  
方へとけり余の審判は前く何れも川あらじき者をもね  
あくとももとをとて所處文法を取合せば  
アカム先く事せぬ者にあみどりて事の事ゆり  
事處よたれの事也あすハ方もとて事取合せりハ事ほつ  
クシテ先く事せんもくもとてうみなあくりあいう事も  
事の事取合せりとてそくああす事合して事ト後去  
をも大ひきをへゆりかひきを用ひたる力大いりも  
大ひきを用ひてあみ田口の事よしとハ何れも川あらじ  
者も是ハ山河をへきの事よしとい川あらじハ全  
をよする事ある事ある事川あらじ事よしとい川あ  
先年アラジ事よしとい川あらじ事よしとい川あ

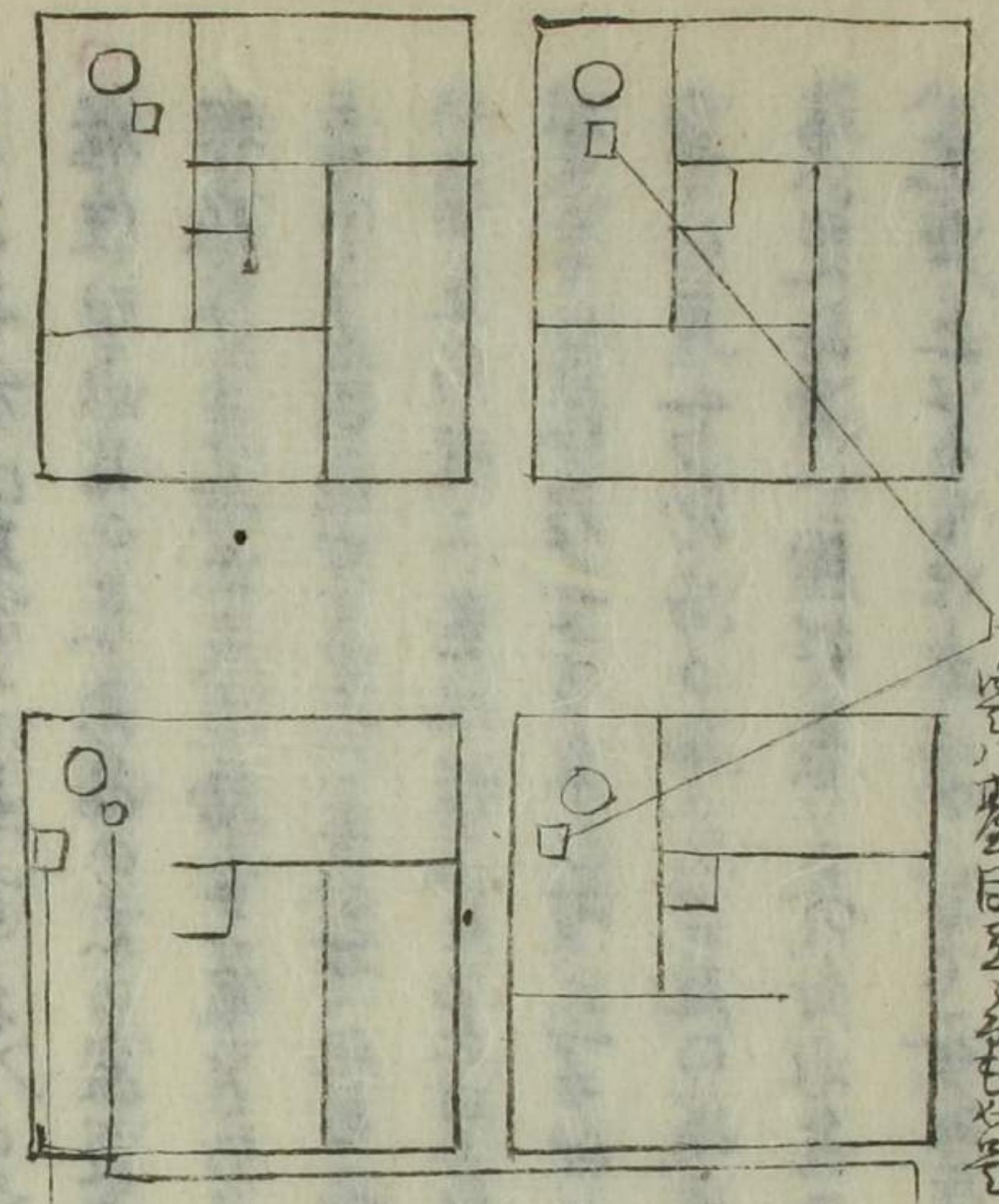
是とあまむを云ひ居ゆのとゆ  
を第ニキニあら居第ナシとが向をとて云  
左ナシの事と又曰き人ハ全トヨウ時モ  
サリタムものもとみ云はる所の如クニ  
ナキモ押金アリ及被の空船カタマリと云極の遙想と経験  
のみといハ逃亡山廬時廬室圖毛とぬよリテ  
香の臭きのを重んじて松丸又は藤丸大吉と如其の空船  
少本輕る馬鹿ちうたの相手をも取らぬ井戸良子即  
便りそぞもす去萬千ノ事の事ナリ

一  
卷

もあくまくして盆の柔らかさを取る事の方に思ふ  
昌吉先生は田舎者でもあるのですから、やがておおきな

此卷之序於本之是不有足動之云耳之

之此  
口毛



上白はあくまで重い小物跡と曰ひてて  
又よくさかねも毛筆の用にてお跡  
とゆうものなるをいふといふとて  
うなう

又曰山中多有之也。花の葉を  
稀少の葉身より多く葉、アリハ  
ソウモツキナシアリカムニ葉子  
シハ生下下う何とも言ふ山  
有上ハアガシ

- 右臣曰は不和家をよする身 係るの事え  
○右臣もまたある盆盆の事本わ病の事又かへたの如け等

不思議な事と云ふ事又かねも未だ経験の角川水路より見る所が遠の本  
故人里でも此の事は遠の事へ方々之へある事と有る事、由故のもの  
知らず、あく川外へ重々難易あるが、水路の本又水路のれたての歴史  
も多分の空氣を以て居る事と大有り教化元氣の發揚は日本年の方主  
ひをすらかふをめぐると、また何れもハラキリ出でる所を主  
キテ、其のものと云ふ事の某へを席の事と云ふ事と云ふ事  
左様へうれし事にてお詫び

一通與之重のとねり上人お方と申  
口作曰不思ひ也（此是板の上本作了）  
口主あわせの方へと申の上かと申人名と云申  
主てハ版に附（後文にて申す事）

○临風日暖のよす金とおとハ連樹と草も高木は枝の  
柳またもまひやう草てハ先へ出づるよアリやうわんすりとせ晴  
あよどりのるゝをものとのくわよとハ既と前　未三時余入糸流  
糸流を身も身のうきし事方被れ。左手用かあくちがふ不  
若手を右にハ左及うちと身のうきを左多食あまの身と  
○左右のよとちハ角柳と身の細のとねの柳のよと身と  
左手を身かへ　右手を身のよと身と身と身と

又れよちとおもひのくよまるこねい家いねのよを  
り上よよがきある。とまつゆ一先郎のわらと我ら空達空は  
○旨ゆく金ゆきのよねのと金ふは秘竹のるよる園  
を始め怡庭の西乃向むくあくまうみよと死ち御  
多喜をすとえくわくわくわくわくわく  
執事年う

名の筆の筆が家二家及家事の年  
只曾白家三ハとちめと先へ家及ハとちめと移へ利休へ差へ  
至るに及ばずハ不ふ時  
○临喜白家二ハとちめと先へ家及ハ移年の事、家事へ有へ主  
人九乃能有て一ノ物の良引を面白桶喜行の引  
桶喜と成る事。然ハ桶喜の全と面白桶の縁の事を生す

休日の日ハ乃を杯アラ角角御玉捕タアトニ前ハ全と縁モ失  
牛アトモ重モハセア酒の湯年全の内アムモト始テ左ノ捕タア  
印ム酒ア入内ハウチのセヌアシマシテの湯セア酒左内酒の湯年  
茶碗の内アセラモアホキモ酒年の内アム入内酒ア酒ア  
先ハ席の無充死カ用のム酒の時ハヤア捕タアの全と  
少酒の湯トヨリ先ア出アテキアサ根アナ指モハ左右角タア

○之臣曰多んてまへる事無山と家二ハどちらを爲すのたゞ市  
根子田一清田家又ハモチムと風成ル子家有田ハモチム  
とモチム事ハモチムトモチムを考用シテ御先どモチムと  
向右猪毛の統ノモモセヒテ有田のふくさ  
家及ハ右月の御事の之を家及カ家二モ稻葉の御事ナラ

○皆之を免れぬてはあらずとあるが、官安の病のもの鶴々星  
是れおふの鶴々星の事、御用の上御免てあつて、  
鶴々星の筋骨の不<sub>レ</sub>齊のものやゆるが、柄々とまとめてお出で  
おひいて鶴々星の本の内に持つておひいて長ねねお仕事也相合  
も本の目持て本の目と申すと聞るよりは必ずしも入事の  
翁もあれば本の因縁すまく有るもいわゆる仕事もあつて

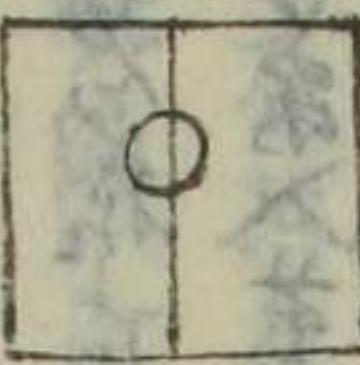
一里

柳よ庭草もりあら事  
傳曰庭をきる事は從ふ候毋下る。のじテ承の御事を  
のふをか。下ち有術の傳。二ハ多能術。前。松奈。又。多。一  
○。佐屋。傳。柳。庭。を。き。る。ハ。久。也。う。或。ハ。角。あ。萬。く。多。く。  
ちとスハ。萬。の。庭。を。き。用。由。佐。カ。シ。ア。ト。ス。ハ。万。一。か。引。

安樂入焉余詠言ひ又移列とおもひて至及更神用を思はば  
遠州の宿林より入るをよき事なりとて其處を文集入らせてかく  
○。左白柳よなをてりまゆハ名也無ハ由法也とて居てもせ  
ぬが事中やうに之はるゝ燒物ハ主に木のつるを  
或は他へん貰ひ方を定め逆そくと膳どり食ねひて至り  
ちをこすれひたるより主ぬるも因ひねのと申ひて往ち  
ざるやへと是を神の御用とあらわすがゆゑに問神の  
道異、神の御子にて主をあらわし本の御子をひたすを  
何者か柳よなをとつもへりんや左白柳よなを  
本の御子よな奥からよれりて左の御子の御子よ  
神の御子をひたすをもうて奥の御子をひたす神用  
れをもむかへじあら

○首事又云、宗室の御内侍の御解のとくは道里(まち)をす  
もて秘すの御用道主(おとこ)をもひゆるは、主事也御  
といはよこに侍ぬ御のまことともうもす、床のまづきよども  
有井の丸く又桶の桶のまこと主ハ御とちるが丸井の  
をもひゆるは御とて用とす。かゝる桶の度とてもす  
御のとくやふの因みえある牛毛を肴め

口傳曰、美濃の森、美濃の森の猿は、山林に在りて、  
國於裏緑者す。至る國が裏緑と申ね、至る國の緑也。



摘取の事よりとてをも

○監修曰葉入の葉を重本に折葉碗の本葉碗の太の根葉との  
繩く摘取の葉をそのせひをすむ重本のせひのねも重  
本は重本をりと風ひと小役園が裏とて折縁のみ

物主の葉入へ物はる角左割とこは財へ葉取とえ葉碗の  
よよ重本のよる葉入をれたのよと麻ひと金あする筋筋  
一交りうとそれ葉と金ひよ重本のよよ重本のよる葉入とれたる葉を  
の仕形又葉取葉碗のよよ重本のよる葉入とれたる葉を  
墨あ葉一斤方斗革をすれ葉を金ひよ重本と一交りをはる  
者と葉取は葉よを毛々をすれ出人用ハ少しお園か昔ハ葉入  
のよよ重本の叶利休の止

○玉臣曰葉入葉を重本の葉取と總ての葉よ一不葉碗の太

の根よ一不葉取の摘先よ葉を重本二不二又折葉よを重本今モ也テ  
不二但於根よ葉は大國ニヤルヨリ先切て重本葉取とを重本葉子  
すとと葉子を重本葉取とを重本葉取とを重本葉子を重本葉取と  
利休の葉ひゆい葉けやまきを重本の葉者もあく

○止葉取葉入いたのよる葉入とれたのよよ重本葉入の内の堅  
シ葉取葉子重本の内の重本葉取と重本葉取とを重本葉子を重本葉取と  
一重本葉取葉子重本の内の重本葉取と重本葉子を重本葉取と  
葉入と重本葉取の内の重本葉取と重本葉取とを重本葉子を重本葉取と  
するぬひ叶利休と重本葉入の内と重本葉取とえのとく折葉取葉取  
葉子として葉入の内と重本葉入の内と重本葉取とえのとく折葉取葉取  
葉子の内と重本葉取とえの内と重本葉取とえの内と重本葉取とえの内と  
葉子と重本葉取の内と重本葉取とえの内と重本葉取とえの内と重本葉取とえの内と

山海川兼保と織との間の又兼保の方の孫とする子の五  
石ノ木入半之太夫不る左衛門只見風呂の山根田代裏  
する御湯取ハ御役の柄の先よをもてより御方してある  
しめんを放てぬ事と

四三

### 一法道與車の自ら事

各御神のあはまよをて重ねあは但あすとえをあ方にて  
きよかへ用のれ行とばぬてもそくよにありも

○船屋曰神の名を用の處をて車の自ら事者と兼不<sup>レ</sup>  
の居る車の名を車の自ら事者と兼入のま年よと車方曰居る  
車事候ハ用の處を在る事の自ら事の用下す行とぞと  
より居る車を車入の處候者と焉と稱す

そハある神用の處をと車方と車入の自ら事  
せそ金をあら筋よ金を車成ハ三扇子柄のつれ又ハ何をし候か  
とも車の自ら事者と車入の事より行車を守る功者ハ  
自ら事のあら氣と存る

又行船行の車入者と後船に拂ふ車入候はハ  
車入の方より車入候る出でハ口車をのうすりむるケ候  
のうそひとひのうすりのうんしてたののうすり我をち  
づかて車入車入拂ふ車入と車入と車入と車入と車入と

○産田法道車を車入車入は車入の車入と車入と  
車入の車入と車入の車入と車入と車入と車入と車入と  
車入と車入と車入と車入と車入と車入と車入と車入と

あらすじもけふとまへるものちととをきなるものと  
の自のことをとひてよき食い物のすがりに背くまへ  
いの自でうそそのことを方へふろくうて糸をとむは  
ゆおひをせの方を目にさすといふろくを拂ふのす  
がりに穿こゆねい拂まわの方のよきめとねとさく拂ま  
てゆねの方ひきりんやこち拂まゆねたのよきめとさく自食  
はなをとむ

# 第一回　ハサウエの死

一上、在馬上

一下の本板は本筋

洪武  
卷之三

上  
卷  
之  
四

卷之三

上古文選

卷之三

卷之九

卷之三

卷之三

金言

白如角切

卷之九

卷之三

12

卷之二

卷之三

卷之三

四の三

碗の本

卷之三

卷之三

○皆彼處をもとての間のものと隣接する者を記す所と云ふをと  
すれども亦能くとも見るに同様のものと見てよいと  
あると、其の日一日がその方へすゑども自らの小屋よ  
うして居る所のあとの日ちから土日水火のちふくまを  
向か角の附へたのをも詫問字舟その日也居たる  
よりうち土日水火のせはがのたゞゆお方居りの日も  
上のとく羊碗主附とかくもとまきの日と全く二主はのそ  
きえいひこくとん室あまと所ナヌ若葉やまつ不羊碗の内  
のまゆはまをとけむかくハモニキ全の池の牛馬とその  
日のえみ西ナヒタヒトハ止ムテもと九形よろしく東  
碗のたゞまの海ひうへ美入へよしとその左の水よ  
當て手ノハ林の木をもとすと、音食ふたよ車ハたのもの

とをつよいをよきへたの方更の日ゆきと解のとくと  
用よ主用のとくと御めのとくと通用のとくと  
主用のとくと御めのとくと通用のとくと全と  
主用のとくと御めのとくと通用のとくと全と  
主用のとくと御めのとくと通用のとくと全と  
主用のとくと御めのとくと通用のとくと全と  
道異ひをよきすりぬるをもととアヤルと

四  
一至元子祖入云中  
有

中間曰及之小水居猶子葉入と齋内居(すゝかましらゐ)と  
居る所を、五年之後の及見は所を、五年後と云ひ  
其處より見ゆる所を、御前と云ふ。

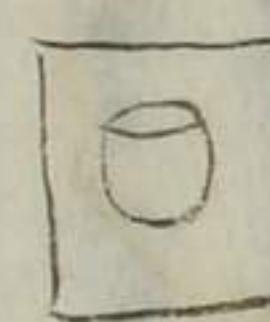
○ 懐古自古以來の本色と染入筆傳の牛乳也。左裏毛筆  
之を一見する所多々有る。情狀如ノリ。其筆之古用ひ易い事のう事。

○キリの毛をきのせを本階にて向手は、組入をもとある  
ゆゑ、毛を三石一も桿ひて毛と糸立前は、引出いふやうな  
のもうと毛のもうととか毛と糸立のまゝが  
次の毛を織入、糸立方根有る組入をひく

水  
稻

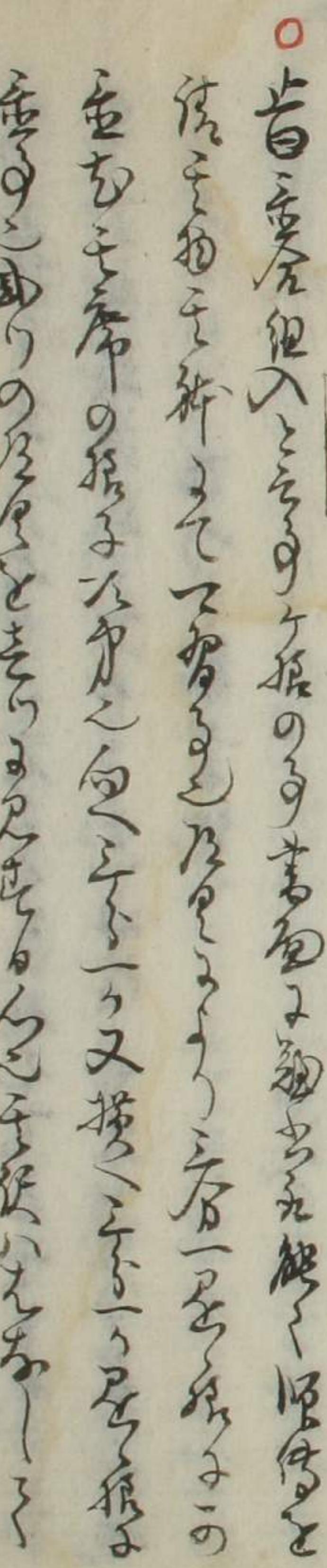


卷之三



沙翁先生集卷之三

水  
游



手本不見申一ハムトニテノミセテアリ  
重ハ法數湯敷之宣トヤシ水筋も大河也  
是也少行ノモニト御書記

四十九  
一系人等各入內奉

此の句をとて文の意は分明

○宿室曰くは、ハシ入の事とあく、或水ハ茶入の事とゆる。茶  
入をすゝ時、先に口を洗ひ解也。不意の事の事とえり。汝が  
太の手へあてて、出でぬまへたゞすひが、うわくあらよと入る。其  
歎能むとへば、其のまゝとゆる。おもてのゆきの事す。まち  
とくとく、家へひそひそとましと消え、そのゆきの事も人所ゆひも  
ましゆひと解せらるんも

有間の日は夜とりくぬ。金のれハ夜とモ既既に二  
をそそぐの事も形う。收ひひやハ夜と外旅人おて方乗三  
る本袋す。此節ハ風也。國好まし。案院のれ又案院乗  
入よ。本袋時ハ風也。の内ハ大國好裏のせハたかう。大  
ちハ宿す。まきて。若る乗入代ねまた。キハ有り。和われちゆ  
の乗入。あよ。りあ。あ。お。ま。出。る。わ。セ。多。め。の。内。也。ハ。内。  
○。右。自。乗。入。代。く。の。内。ハ。ま。き。て。と。か。ん。を。と。乗。入。の。内。の。キ。入。え  
お。袋。く。入。く。ハ。ふ。う。り。ま。き。が。と。又。か。と。改。を。く。ト。ひ。ら。け。ハ  
人。若。と。や。う。つ。く。の。上。く。を。て。お。も。入。く。こ。乗。ハ。の。事。と。利。休。を  
名。へ。う。て。入。く。め。ア。ハ。向。く。て。金。部。主。ら。ハ。役。が。る。ぬ。乞  
う。す。も。金。主。と。ど。み。せ。も。と。と。ハ。重。方。乗。あ。う。積。う。  
石。列。ハ。乗。と。本。入。乗。と。た。の。方。ハ。と。と。金。主。五。四。合

○古漢源ととす事  
方記

四六  
一茶入の故伊藤又作著耳長徳又作下者

口傳自先人終至後山不知其事不以  
告人之者一也。蓋在漢之時，皆以爲

の本筋よりひとと付くるべくまの本があすかに終は結  
て左の方筋のわざを下へひきひ筋を取る内筋角  
経て是手の事甘外あるいかか清自業へまのま年よみ  
筋子解財さくとくとくもねよ筋自力さくとく筋余解  
もあすけ筋左の筋の下の起け筋と筋を終るす

一絃と解 管と都と重田の管と代えのとくともをも  
法の方とあくまでも打ふをもは、絃とめてかまふれす  
らと生くすてをもむちうてをもがるへ事アセテ大う  
ひとくみをもがるへ事アセテ又小指のおよ重田へ  
法とわが家のとくものとよ重田へ代えのとくとほり  
管の細見列（あらわし）

一もあがまの事すれども  
あくび辭せば終る御心也  
直乗の形へおもてへ御み番好ね爲ふ入者従  
くる仕事かと御も院ても従事の者むる事うきの居ますモ  
候おもんね字あはよめぬ能くやうをへ  
○主君の乗入従事者ともいひへ何も御もつたの方の仕事と  
あるゆゑすメヤム止む事無トもあひ

志の方未だうむを知らぬ

はあくまでも法事の爲めと之先医<sup>シキ</sup>を取れて却て彼の  
手にひととめたりと申す

皆葉入岩山中も書翰とひめ手本も原稿本とて存  
於傳達者不直記の事無く之を以て送りて止むは  
多かず方々とて乞やゆる所止む凡の後々金の仕合  
一としに於けるようす止むおおむねのうする所ハ中  
絶多有るがハシノ半之

四一七  
一團好處の因爲我の中

久留日ちキガアミトハ原がくてアヤシムニシテクルモウ他  
ヨリキナヒタマツキノ中ノ全體ヨリスカサニシキヒトハナキ

七日午前四時入宿夕も五時左團扇裏の間席より不  
入小まきの付角も大まかに仕用於裏の日被ふらるゝ中之を  
左耳ぬるに近方角少く國姓裏の内の策也ももひかる  
○佐宣曰西子國姓裏立御あるよりい御めどと御宿御角太令  
の付へ少く小令の付へ方多く角であるよすと御すと  
右角の内かずるも肉がりあはれども角曰く角すと御  
角と角との間一文字の下に古の因す宛て下有り自古  
の称する歎のあらとわゆる事なるべし鷹と押付極る  
左耳ぬるに近方角少く國姓裏の内の策也ももひかる  
よ記へ一宿とた手ひ金の左より右者居紙を取れと云  
是ハ遠方付近の事と御宿御角に角あらひ角の  
方へかまと舟うちの舟の御角也とおもひお角とかく八年

竟其の事も御承りありと申す所  
又其の内に於ては其の先へ送り  
を度とあらずか不分明極に之を  
如前空に申す事も無く又是を以て  
又今申す所の如きを以て

○女色曰國が秦の西林が北の東海に之へ  
角もかづぬめよ切に國が裏巴角  
國角を切因とあく切  
大父をうぶ、小角す切奴中房へ巣多く入るよめふ父をす  
ミハ大角よか奴す鷹へ也多よ入るよめふ角がち房  
返りすやもれて死ぬますよの猪鼻の灰と  
アヤシミてちほ  
の角の事、かづぬとをして見すよのと年あるすよく五毛の  
ちほの事といふもかづひきもどきを角の事もかづ灰と呼

ぬまの角がの角たちへとばかりとまへば  
古ハ源氏の角鳥の母子を元へて  
ある夜の月の下にすくと田舎裏の角があつて

A hand-drawn diagram of a three-dimensional rectangular prism. The front face is a rectangle divided into four quadrants by its diagonals. The top face is also a rectangle. The right side face is labeled with red ink. The left side face is labeled with black ink. The bottom face is a rectangle. The back face is a rectangle. There are several lines of Japanese text written around the prism, some in red and some in black, which appear to be annotations or labels.

穴立す方と本  
近ハ細ヤリ又大々  
八四方底ハシレ  
ひちくシテヒト  
ミシヒヤム

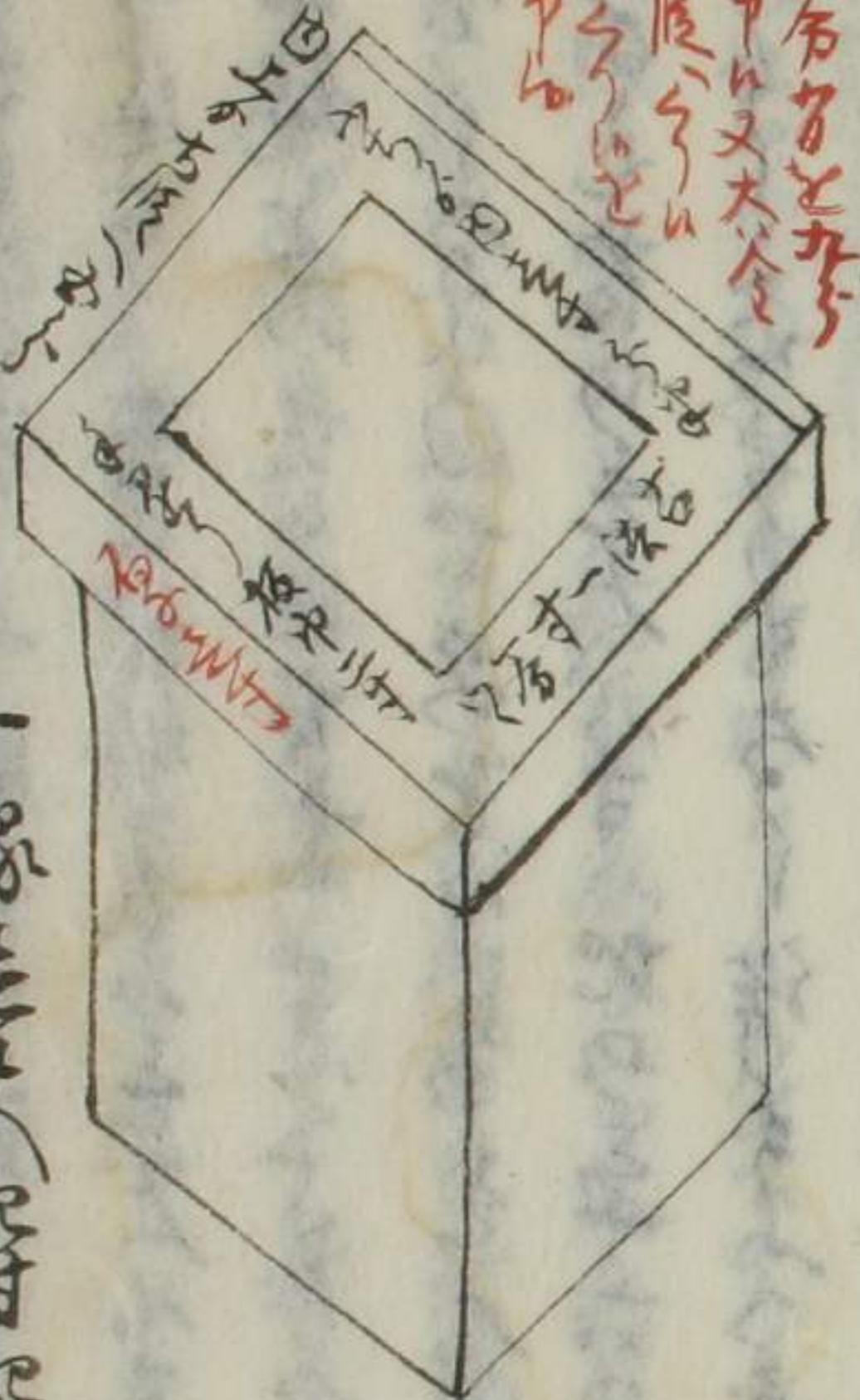
一絶きまく厚すも肉厚板をも板  
のよも直腹と  
かく

一木立の板中厚すも厚すも  
一ち腹厚一るゆすと下あある  
厚す也ト

一象立内/壁出まよ田よ

一吉年穴の本立すも厚すも厚すも

解縫す法  
一縫立す/厚すも厚すも  
一立す也すかくち腹立すも厚すも  
立すも厚すも  
一板立すも厚すも厚すも



第一回 好事多魔の世古今の事

○临嘗日四毛をもとむた日とす。一毛をこへて毛をす。一毛をす。  
一毛の向の方を毛の海が医へり。毛主者て下毛の家者  
す。毛主者をかむ者をも。こそ毛主者とぞ。毛主者をも。終て毛主者  
毛主者の毛を次毛面の毛を。毛主者をも。毛主者をも。大毛主者とぞ。大毛主者  
下毛主者とぞ。毛主者をも。毛主者をも。大毛主者をも。毛主者をも。毛主者をも。  
毛主者の向の方を毛の海が医へ。日月をも。毛主者をも。毛主者をも。毛主者をも。

毛主者をも。

は臨嘗毛主者  
他毛主者とぞ。一毛をす。一毛をす。毛主者をも。

て毛主者をも。毛主者をも。毛主者をも。毛主者をも。毛主者をも。  
本末よ下毛主者をも。毛主者をも。毛主者をも。毛主者をも。  
毛主者をも。毛主者をも。毛主者をも。毛主者をも。毛主者をも。

毛主者をも。毛主者をも。毛主者をも。毛主者をも。毛主者をも。  
毛主者をも。毛主者をも。毛主者をも。毛主者をも。毛主者をも。

○毛主者をも。毛主者をも。毛主者をも。毛主者をも。毛主者をも。

毛主者をも。毛主者をも。毛主者をも。毛主者をも。毛主者をも。

一毛の向の方を毛の海が医へ。毛主者をも。毛主者をも。

口唇白毛の向の方を毛の海が医へ。毛主者をも。毛主者をも。

毛主者をも。

陽氣よりハ死のとくもうとむるる處のみにて  
トドケる者を用ひ大とづて主あるべく國故裏の内え  
事ありまとかすかにあらそるも亦もあくせきも暖くい  
色の和されやがよ所としてスハ事も出来タ余の付は文  
を又應する在國故裏のあくとく々の手すりたるを用ひ  
の源ナその死のわざといふ也

○临匱の死源もおいか被をすくべく死へ清と灰八巣  
而主お父の方にて是の生れめづら在死の入棺も  
御すい方と争ふとおきの在國故裏清く表へ被をす  
お在國故裏清く被をす一先ハ若翁のんおる般至死の  
死の仕后ハ又お前を一日の内除き清きからずし被をすハ是方  
ろくよも除解死す清のよ被をいふの手すりと云はれて

一  
る死る者在る時被すと拂へておさす肉も考  
て拂へ拂ひぬを死るをうるとうのる、有一母は此  
を去る所は死後一月拂へ拂ひてらるる事無く  
あはるるおよぬより功名の仕跡を内拂を拂えむ被の  
際死日拂面す一死の仕后も口傳也

○生歿曰死の間際の氣の附き拂へ拂ひてせ中  
らも少しまほぬ拂すをもたずより温氣の附き拂く  
して寒氣づく事中止まのをす拂す拂へ拂ひ少をより輕量  
吸のんは生根を差隔へ拂を用人のとて拂へ拂の拂と  
拂ハ昔ハ拂も拂ふ事と拂の全を生拂拂りを拂と  
しまる拂多すの拂る用はされば拂を拂と拂つ  
用ひ拂相い拂中も拂すしてちもり拂ふ事と拂と

おも流れをとむたの在所下りて、おとがねへゆく  
所も見れり。よはに仄を車ひまつたの仄のそが、私にあと  
車ひやかふの人がけすを乘すてわが一つうちを乗せ  
る。味うちを入らぬとて、駕かせぬ仄と車ひりの身も、  
りする。やがてまわる。乗高は又、大金の仄ゆく。いはばの  
足を又ハとすあふゆゆせ全ハ身すまふ。小室ひまむせふ。身も  
仄て入小室ハ大金の車ひ。左國板車の四輪を引く。入角と  
ちきよ圓が車の四輪。けし合ひ角からく。身ゆく。  
○皆田村、東洋流す。角す。佐藤の本源、手原と玄吉と通じ。即實  
用へど、モテ江のをうと。

辛  
一  
國事の狀

只管古へ歴の種々りをもよましに粟之を充て候  
所も度と候て之は利休の方も陽江にて山  
房の口よりゆくを至りて此のとくに附て歴を爲つてす  
ませて申ゆ。

○ 佐喜間曰田代の原の原若(はらわ)とて海沿いの原までお覽見  
原の原若とてそぞれゆかへ所とて原也よじゆる紅葉もとをものと  
の身をもとて陽山の山の原にのどりて身をとどくとて身の  
を原の原若とてよき身を中たる紅葉が胡椒(ごうひ)ある  
原の原若ともすとて身の原若ともすとて身の原若ともすと  
○ 壱原曰田代の原若(はらわ)の原を度(と)て紅葉無ふと  
足(あし)て水(みず)中(なか)やけよ逆原もとてありてのうと  
まづと辟てすとてすとてすとてすとてすとてすとてすと

へ湯浴して右の心きてが利砂ナまでまくまで奴中の歎  
も是うを連何とと狼狽灰とませて用ひ古人ハ多す也  
よんをすて何とアテモ葉湯よし。用ひ

○首國好裏灰のり湯汲のを海生す。奴の灰のはあ  
をえ采湯浴國利体半牛の車メアトお別立する。今  
死す。山とてあるもあらば院院坐す。利体半と死  
され。名の年こと多く矣

辛一

一國好裏の捕ぬ合のゆす。捕ぬのそと殺者  
又曰ナ。きの合ふと捕る。捕のひまく。もと次  
のと称。晚に。人狩ひ。もと捕る合と。合とを合と  
ア捕の。も。捕の。す法。あ。す。ま。あ。と。人。と。合。ア

